

校園長室から



学校教育目標

共に学び共に伸びる子ども

- ・いのちを大切にできる子ども
- ・だれとでも仲良く協力し合う子ども
- ・意欲をもち学習する子ども
- ・ねばり強くはたらく子ども

令和8年3月23日 第98号

千秋楽

先日の金曜日のこと。家に帰りつくとスマホに着信を発見。折り返し電話をしてみると、かつて一緒に働いたことのある後輩の先生。

「叔母が急にいけなくなったので、相撲の千秋楽のチケットをもらってこないか」と。三連休にすることがないなあと考えていたところに、突然のお誘い。ありがたく頂戴することにして、相撲の研究の開始。

春に亡くなった先生が同級生だと言っていた宇良関がずっと気になっていたので、相撲はいつもチェックしていましたが、「生」の相撲を見るのは、はじめて。飲み物は持ち込めるのか、お弁当はどうする。そもそもこの席かなど悩みはたくさん。

当日は、序ノ口、三段目、幕下、十枚目(十両)、幕内と続くなかの三段目の最後の取り組みから観戦。ぶつかり合う音、ひっくり返る音、土俵から真逆さまに落ちる音。音がなんといっても「生」の迫力。

トイレに行くたびに本物のお相撲さんと出くわすのも、「生」観戦の醍醐味。一番気になっていたのが、パンフレットにあった「神送りの儀式」。表彰式などすべての催しが終わった最後にやることになっています。

「相撲は、神事」と言われるので、ちょっとおどおどしながらその儀式を待っていますと、デビューし活躍した若手力士とサンサン七拍子をしたあと、神事を行うとかで、若い行司さんをその若い力士が胴上げ三回。

思わず「これが儀式か」と声を出してしまいました。

ときどき神事には、あけらかんといいますが、「そんだけ」と言いたくなるものがありますが、全くその儀式は、あっけらん。ただそのあと何人かで急いで土俵を壊し始めたのには、凄みや迫力を感じたのでした。